

概要： SDGs 運動は2030年という終盤を迎えようとしているだけに、これまでの成果を踏まえポストSDGsに向けて対応が急がれるようになってきた。本系統では、今まで市民レベルでのSDGsの問題を扱い、SDGsの問題点や今後について必要に応じ数回に分けて述べてきた。そこで、今回、SDGs運動や研究の区切りを迎えるにふさわしく、これまでの市民を中心としてきた想い(社会的基礎土壌)を総集しまとめるとともに、近未来の問題として諸問題をも論考とした。

1. はじめに

1.1 目的

本稿の究極の目標は、社会づくりとして社会的基礎土壌の(健全な)積み重ねであり、生活営みそのものの検討および営みの延長での対処である。また論究はあくまでも市民主体を念頭におき、同時にポストSDGsを切っ掛けにした市民自身の社会づくりに目を向けることにした。

研究の遂行には、世界の大運動であるSDGsが市民にどう思われた(思われている)のか、その実態をまず把握し、SDGs運動が市民にむけ今後への良い影響を及ぼすか否かを見極め、近未来の諸事象にも対応する市民行動の在り方を探るとした。これをもって市民社会づくりとする論を展開する。これが本稿の目的である。なお、市民の諸問題に対する反応を、市民の直言や議論の意見としてさりげなく本稿に入れ込んでいることを断っておく。

1.2 問題の所在

SDGs運動そのものが国際的にも日本全国にも進められており、国や自治体並びに一部の企業も熱心に取り組んでいるが、研究・教育機関や(一般)市民にとってはどうである(あった)のか。「いや積極的な方も多かったとか結構恩恵を受けているはず」といった声が聞こえてきそうだが、統計的検討についてはこれまで見た事がないので何ともいえない。とはいえ、市民層の動きは推進側の思いをはるかに下回ったのではなかろうか。こうした状況で何がポストSDGsなのか、理解に苦しむ。市民層にとってみれば、日常の生活の営みの中で種々の行為に創意工夫があり、それらはSDGsによるものではなく、あくまでの生業の次元なのである。

それとは別に、研究界でも一部熱心な派があるかと思えば、SDGsとは関係なしに事を進める派もある。後者の派によれば、SDGsを切っ掛けに社会システム論を巻き起こす派や社会的盛り上がりを経とする新たな派もある。

しかも、そうした社会情勢に加えて、近年の科学技術(特にAI技術)の急激な進化が人間存在を脅かすのではと危惧されてきており、科学技術と人間という枠組みによる近未来事象への対処は世界的により緻密なSDGs級の取り組みを待たねばならないのであろうか。

そうした場合でも、SDGsの存在はかなり大きい、その趣旨を受け継いで第二弾という話が著者の周りにはあまり聞こえてはこない。となると、国際機関はこれからであり、研究機関は我田引水になりがち、となっても共に大い

に結構としてはどうだろう。実はそこにおいて過去の盛り上がりがそれなりに受け継がれているのではないかと。ならば、そんな動きを現代的潮流として、著者はむしろその動きを尊重し、世の中に多様な展開があつてこそ、市民層にもそれが伝わるといういたい。

1.3 アプローチ

(1)対象項目：これまでの研究構想も含めて取り組むべき項目とそれに向けてのアプローチを列挙する。

- ・市民による現状のSDGsの受け止め方
- ・今後に向けたSDGsを含む広範囲な構成
哲学論争、倫理論争、社会学的論争を含め
- ・科学技術や経済成長の新展開がすぐそこに
科学技術の急速な進歩にはどう対応か
- ・社会における市民の役割として市民の在り方

本論構成は、今のSDGsの様相、ポストSDGsとなる論議対象、新たな世界の構築、から成るとしている。

(2)本稿の構成(章立て)：以下のとおりである。

2. 市民の反応；全般、企業側、自治体
3. 市民の大所高所からの反応
4. 学術系の関わり
5. SDGsと社会・構成論；全体構成、根幹、最上位論議
6. 今日的構成；SDGsから引継、市民に求められること
7. (最近の思考事情) 教育問題；教育制度、STEAM
8. (最近の思考事情) 社会と個人；権利・義務、
国民性、平和
9. (最近の思考事情) ウェルビーイング；都市・町、人間成育、システム
10. (最近の思考事情) 科学技術；AI、農
11. (最近の思考事情) 子育て・高齢者の問題、
実状、若者、親世代、高齢者、働き方、世代間、世代間生育
12. (最近の思考事情) 人口減少問題、空き家、過疎地
13. 人間の欲望 現状、文明・文化、基礎土壌
14. 市民の想い 基礎土壌、市民展望、土壌活用、
機能集団へのヒューマンズ
15. おわりに

A. 附録 基礎土壌、コミュニケーションのコミュニティ、研究スタンス

(3)着手事項：本稿では、SDGsの再考やポストSDGsの進行の上で、市民感覚・市民の想いがそれなりに盛り込まれればよしとして、市民層の活力向上への道につながることを念頭に置いた。また、市民層によるSDGs運動の位置づけ

、
が可能という想いを何とか形にする方策を練ることにして、SDGs 運動を市民の受け止め方から考察し、SDGs の背景に着目し、諸問題を社会づくりとして捉え直すことにした。そして、改善の方向については、社会づくりとして市民側に着目し、社会へは足元からの市民の順次積み上げを図るとともに、市民感覚で理念理想(倫理も)を基礎にした。

2. 市民の反応

開明的な方々の先鋭的な意見を紹介する。少数派の意見かもしれないが、幾つかの自由な語り場(コミュニケーションのコミュニティやカフェ)にてよく聞かれるものである。今まで小出しに紹介していた事項を補充して以下に記す。

2.1 全般について

(1) 推進側の施策の関連性・関係性が市民には見えず；

それぞれの施策の関係主体者が市民に働きかけてはいない。市民は個々の行動には参加もできるが、単に限られた範囲内・領域内での行動だけでは事象の理解につながらない(繋がりにくい)。

(2) 息の長い運動という主張が弱い； SDGs のGはゴールであるというのが目標と捉えることにして、道は長いといったことではいいのでは。ゴールに達すればそれで終わりというイメージの運動の進め方自身が市民には即ない。

(3) 推進側から明るい展望が提示されていない； かなり熟慮したプランとしても展望がない場合、不都合があってもすぐに改善ということにはならないし、不都合の公開もないのでは、と市民側の見方がある。もちろん、展望は願望や誇張ではないことはいうに及ばずだが。

(4) 経済発展が原動力； 経済発展が環境問題を始め諸問題解決の原動力として捉えられているとはいえ、これまでの経済が実域から虚域へとシフトしていることが気になる。今はいいが、近未来対応すべきかと思う。

(5) 急激に進化する科学技術について； 科学技術の進化について SDGs には何も目立った動きはない。人間の存在が問われ出しているのに、火急の時代に対応する枠組みがないとはいえ、問題である。SDGs を超える事象はもとよりSDGs 話題対象外としても扱うべし。

2.2 企業側について

(6) 企業側が推進といっても胡散臭い； 事業の一環としてSDGs に取り組むのは企業にとっては自然な形態であるがゆえに、ありのままの姿を見せることが却って難しいのか、胡散臭さが先行するといえる。胡散臭さはSDGs バッジのせいだけではない。

2.3 自治体などの推進側について

(7) 推進側と受け手側との対話がほとんどない； 推進側が「こんな目的でこう取り組んでいます」といった説明会や講演会が市民向けに確かにこなされているが、推進側と市民側では受け止め方が違っていることから、それが推進側と市

民の対話ではないことはいうまでもない。推進側が己の思いが市民に伝わって協力が得られればいいという思いがどういう訳か、市民に伝えなくてもSDGs 問題では当たり前のことからそれでいいというように見えてくる。これには驚かざるを得ない。

(8) 行政と学が連携した市民会議も問題； 市民会議では参加者を無作為に選ぶことも問題ではあるが、それよりも問題なのは、市民参加の形態をとりながらも推進側主導が貫かれていることである。これは市民会議ではなくても、有識者や実務家を中心になって実施される各種のWS でも一緒である。そこでは、(主導者側がすでに決めている)結論に向けて参加者の意識を高めていくというとんでもない失礼なことを平気でやっているのではなかろうか。

2.4 教育、各種団体の市民への教育について

自治体は管轄内の学校を通してSDGs の各種啓発教育を行っている。学校を通せば効果は抜群との主催者の談ではあるが、市民側は市民にとっては二通りの反応がある。ひとつは肯定的対応であり、いま一つは画一教育としての弊害とそこから生じかねない差別主義による弊害である。

啓発教育は市民の啓発だけに、こうしましょうとソフトな雰囲気が強制力を持って画一化を推し進めるものである。これは、子どもにものごとをじっくり考えさせていないことに加え、根本的には教育部門の推進側の方も懐疑的な境地で教えるだけでいいのか、理念理想の無きところに未来はないのではないかと、検討要が叫ばれている。(教育体制の変更は国の(国民一斉育成の)根幹にかかわるゆえ(自治体や学術レベルで)おいそれと変更はできかねない)。

3 有識な市民の反応、大所高所から

市民にはもちろん種々専門をお持ちの方もおられる。そうした方々がSDGs を専門にしていなくても、それなりの良識見識を発揮され、市民レベルではそうした観点からの受け止め方も貴重である。この場合をみよう。

(1) 意見の根底； 市民側には推進側の意向・実績などがあまり伝わらず、各人固有の運動参加が全体展望の次元では横のなかりを難しくさせており、英知結集は十分ならずと見える。

(2) 他専門の方が市民として発言；

- ・直接SDGs とは関係なく、世の中の社会ムードが別途作られている。それはウェル・イング(以下ウェルと略記)である。最近の専門家においては、ウェルが成長戦略の一環としかみられてないムード先行の何物でもないとの指摘が多い。

- ・民間技術者は身銭を稼ぐことを主とし、明日の体系をより充実させることに関心あっても自分らには何もできず。これらは学会や大学の仕事であり、皆さんがやっていただければ自分らはもちろん応援するという(民間人の偽らざる気持ち)。

- ・企業はSDGs を企業理念や業務拡大にと取り込んでいる

が、研究や教育の方々も己らの使命に準じてやっているにしては社会にはあまり見えてこない。企業内専門家が市民向けに今一つ工夫をして欲しいものである。

(3) 企業には； 企業倫理に社会性を今少し入れて欲しい。企業を守る企業倫理を超えて、社会貢献というならその倫理もあるはず。しかも業務遂行においても例えば技術者はそれなりに技術者倫理（社会性を帯びた倫理を個人資格で例え僅かであっても）をもって実施もしている。

(4) 人類愛の視点から； 市民はSDGs に対し批判的な方を含め、市民として今やるべきことはしておかねばならない。人類愛に燃えた発言もその一環であり、またそうした姿勢が社会づくりの根幹をなすものである。以下に記す。

・（気候変動が）このままでは大変な状態に陥り、もちろん後世にも危機をもたらす。だからこそ、市民は（推進側とは違った位置から）地球環境危機として SDGs を言い続けるし対応もする。市民とはそうした方々のことをいい、市民自身がそんな市民気風を育てながら、社会を漠然と支持・支援するという社会づくりを実践していく、と考える。

4. 社会側からの関わり、学術系

社会側からの関わりとして、学術側、企業側、行政側があるが、上記3個は2章、3章の市民側から見える様相として記したので、この章では学術側のみについて述べる。

学術として建築のSDGs 系では、SDGs 活動の重要性に鑑み、委員会運営として研究が実施され、過去には社会に向けて SDGs 提言が行われたほどである。しかしながら、他の建築系や他の専門分野系では温度差がかなりある。どちらかというと（温度の低い系においては）、SDGs の理念には理解を示すものの、将来に向けての諸現象の解明・対応・対策立案、イバ技術開発、等は（SDGs とは無関係に）科学・技術系の使命としている。これに対し、企業では、特に SDGs 運動が企業の進む方向と合致すれば、勢いよく企業活動を推進するということになる。

学術系にしても、企業をも含めた技術開発を進めることになれば産官学民連携といいながらも、SDGs に関する温度差はそのままである。

5. SDGs と社会、SDGs 構成論

5.1 SDGs の全体構成

SDGs において、17ゴールの背後にある根幹思想について。**(1)SDGs のウェディングケーキモデル**（図1）； 17ゴールを関連性や互いの位置関係について図式化したウェディングケーキモデル（以降ケーキモデルと略記）がよくひきあいとされる。モデルでは生物圏、社会圏、経済圏の3構成とし、各種のゴールを3つの圏でくくっており、しかも現在の社会的状況を反映して、経済が社会構成の最上位に来ている。こうしたモデルが SDGs の構成を的確に表しているとして、推進側では推進実行の方々が SDGs の考えを共有し理解を深めて推進行動に役立

てているという。

(2)背景・背後； 17ゴールの3圏への集約化は実にスマートだが、各ゴール背後にある根幹を少し関連付けたい。その工夫として、パンケーキモデルの縦方向の連携極太糸を垂らすかのようにいわばクリームを垂らすように我々が思い思いにイメージをすると、SDGs 背後の理念理想が繋がって見えてくる（きそうである。こういう見方もある）。以下に考えを項目にする。

△本体のパンケーキ；生物、社会、経済

△クリームのようなもの；社会思考、人間存在、生産・生活基盤

・社会的思考系；思考実践、人格、尊厳、等

グレートアップ；公平、共生、平和、等

・社会的人間系；直な人間存在への人間系社会づくり、健康・福祉、教育、権利・義務（責任）、等

・社会生活基盤；自然系；環境（保護、共生）

社会系；社会システム 経済

産業（インフラ、エネルギー、水、街・都市）

人間環境とは；「自然+社会」に人間を加える

人間が自然との共生



図1 左；ウェディングケーキモデル

by Johan Rockström, Pavan Sukhdev 文献1
右；SDGs モデルの後継例（二例のみ、文献2）

なお、本稿で扱う理念理想は、社会思考系と人間存在系をあたかもクリームイメージのように考えられる。

(3)思考背景の歴史的変遷； シニア時代含めて SDGs がどんな構造かを、社会の主なバリエーション、関わる階層、推し進める階層といった枠組みで整理してみる。

a.MDGs 期； 貧困や飢餓をなくすこと

飢餓・貧困は資本主義の後進国への威圧的対応による。
富める者の弱者への救済。

b.SDGs 期； シニア時代を引き継ぐとともに、

より良き地球環境づくり←ほぼすべての分野に対処。
経済発展と環境保護を同時になす。

c.近未来（ポスト SDGs）；虚業経済や急激進化の科学技術。

両者ともに、人間を苦しめると警戒。

文明人の多数的貧困が大問題になるかと。

資本主義による過度な弊害への対処。

・人間を中心にして、シニア時代では困っている人々の支援救済があり、SDGs 時代では環境や人間が持つ保有力が地球全体の諸問題に基礎的安定を与えるよう振る舞う。ならば近未来では、人類そのものが生き残れるのか懸念されてもいるので（火急の状態にはまだ間があるのかどうかは

、
わからないが)何とか対応はしていくべきかと。ここでは
近未来に向けた事象を諸問題として後章以降で扱う。

・諸問題に対し、現行や近未来に向けて視点を整理し記す。

現代における配慮；SDGs系にて地球視点、サステナブル
新たな視点追加；自然共生、(東洋思想)、他
新たな問題；急速な技術発展、経済の虚業、他
継続中問題；人口減少、子ども・高齢者、人間存在、他

5.2 SDGsの根幹の役割

SDGs系の思考的背景並びにその根幹について検討する。
理由は、SDGs項目がいえば可視化された分かりやすいフレーム
ではあるが、その奥といった背後に根幹の論理が控えて
いる、と考えることにより、各種ゴールの奥深さがより存在
感を呈するからである。

例えば(一部の)大企業がSDGsの具体的な項目を経営理
念に取り組むことにしたのも、各種ゴールの思考背景を活用
できるからである。

ならば、学術でもそうした背景思考の論理を持って欲し
く、これが、市民層における思考にも分かりやすいフレーム
と市民流論理の二面となって市民の範疇では奥みとなろ
う。こうしたところから市民の認識が学術系思考に(また
その逆も)組み入れられるのではと思う。

なお、新しい考えを持つ方はSDGsから何かをくみ取る
のではなく、全く新しい視点で枠組みを提唱したがついて
いる。かつてはSDGsの延長として論理積み上げも推奨され
ていたものの、先行きは依然混沌状態にある。

5.3 モデルでの最上位論議

ケキモデルの最上位が経済なのはいいかかという疑問を以
前から呈する方が多い。その一方、SDGsのDが開発であれ
ば、これまた一時代のなせる業として受け入れて当然とい
う揺るがない機運もある。

これに猛然と反発したのは建築士連合会の幹部中村勉
先生であり、先生は2026年2月(実際は2021年頃の様
だ)にはケキ最上位に平和を位置せよと迫っていた。残念な
がら根本的な議論はなされずじまいであった。今なお論議
がないのも不思議ではあるが、議論より運動の遂行が最重
要という圧力に押されたのであろうか。当然、このことは
市民にはほとんど知られずじまいであった。

なお、最上位設定に何がふさわしいかは底流の論議であ
り、これまでにグリーン(自然環境、環境保護)、倫理、哲
学、ウェルビーイング、等のアイデアがあるものの、議論が白熱しないの
も現行の圧力(経済主流)が強いから、ということのよう
である。以下に、上述アイデアのうち割合議論の多いグリーンにつ
いては多くの研究者にお任せして、残りのアイデアについて
扱ってみる。

(1)倫理；建築学会では倫理委員会が2004年に発足し、倫
理規定の制定や倫理に関する諸問題の解決に奔走し、今で
は学会のあるべき姿の検討をも含めているので、学会内で

は重要な委員会として君臨している。こうなれば、SDGsモ
デルの最上位は倫理になると思えるが、過去20数年、委員
会の働きが当たり前のようになってきたのはいいにしても、
それが却って古さを感じさせるとの声や、新規のアイ
デアが待たれるといった声も聞こえてくる。倫理は古くても
渋みを増してきているはずであり、何とかその渋みの活用
で道を切り開いて欲しいものである。

(2)哲学；倫理云々の方に言う。SDGsについて哲学思考で
臨んで欲しい。哲学には、SDGsに関して論議があったとは
ほとんど聞いたことがない。理由は、哲学そのものが広域
の世界における理屈づくりゆえに、SDGsという枠の中で
哲学を振りかざす必要なしとの考えがあるからであろう。
とはいえ、それでも論議をと思いをもち、以下に記す。

SDGs構成の論議に際しては、ケキモデルの外側に位置する
ことになる意識世界を当該モデルの最上位にもっていくと
か、哲学的やり取りがモデル全域に及ぶといった視点で、哲
学論争があってもいいと思う。世の中騒然としないのは、
やはりSDGsの枠内やSDGsという縛りそのものが哲学の
自由志向を制限してしまう、とみられているからであろう。

なお、根本議論として社会に種々の事象を絡ませるの全
体の束ねや、そこから相互関連性をどう見出すかという考
えもあるので、かかる哲学論争も欲しいところではある。
あえていうが、SDGsの背後に関係させずとした思想論の
展開がもともと哲学範疇でないとしても、巷(市民)の哲学
として存在しており、何とかして欲しいものである。

(3)ウェルビーイング；第9章には詳述する

人間の自己実現という最上位の状態がウェルビーイングであり、こ
れをSDGsに適用しない手はない、としてSDGs系以外の所
からウェルビーイングが急速に叫ばれるようになってきた。SDGs系か
らはさすがに行動が慎重なのであろうか、最上位設置論に
ウェルビーイングの話はまだない。これをどう見るのか。世の中の趨
勢はウェルビーイングに傾いているとはいえない、の考えが強いよう
である。本稿では、9章にてウェルビーイングの本質に迫ってみたい。

6. 今日的構成

6.1 SDGsから引き継ぐ

(1)現状の不都合；SDGsから市民運動に引き継げるもの
はあるとしたら、それは何か、ここに列挙する。

- ・ヒューマニズムとして、だれ一人取り残さない。
- ・地球規模の国際問題に関係者全員が着手する
という行動姿勢。
- ・誰でもがどこからでも過不足なく運動に参加。
- ・環境保護と経済活動は矛盾せず、ともに機能させる。
これが誰でもが参加できる活動に道を開くという。
- ・すべての機関を使って運動推進。特に公教育の利用。

以上を見ると、現体制をそのまま維持し、経済活動のパ
ワーによって経済発展の不都合を手当てし、かつ環境問題に
着手するということである。虫のいい話というよりも、そ
うでしないと、らちが明かないとみることができる。だ

、
からこそ、今ある環境系以外の社会系のシステムに関する諸問題にはSDGsが震みがちといったところである。

これが市民にとって、最も不満なところといえる。市民においてはSDGsを横目に、却って自らの各種問題に取り組んでいる。教育問題しかり、公害問題(ここでは扱わない)しかりである。

(2)威勢のいい点； 項(1)の不都合点は逆に今まさに社会の希望する事柄とみることができる。ヒューマンしかり、国際協調(あるいは地球環境)の視点の提示しかり、平生では垣間見ることできない事柄ではなかろうか。そしてまた、中村先生の平和をSDGsの枠組みで考えるなど、思いもよらないことである。こうしたことに理屈をつけるとなると議論は面白くなる。

・現状システムのままではSDGs運用には難があるとする、こんな方法もあるといった提示はまさに希望的範疇の総動員といったところであろう。

平和や環境を最上位にする声は期待に値する。

掛け声だけでも十分価値ありといえる。

・企業や自治体のレベルにおいて、社会における行動は組織の論理を超えてはいない(もちろん、企業は国家の論理を超えていないばかりか、企業は国からの支援や保護を受ける側である)。だからこそ、特定の範囲内の方々(企業)のみが国家運営の対象となりがちであり、地域民といったすべての国民の人間一律の幸せを目指すという視点がいつも霞んでみえる。

・国際的レベルではどうか。世界の諸問題には国家利益が関与するので、国際調整は難しい。確かに、世に中がどこまでも組織化されていて、そこに組織の論理があれば、その枠を超えることは必然的に無理であるとされている。例えそれがジェンダーであっても、枠内思考が強いられている。

・それでも希望的な考えとなると、地球規模(世界規模)でのヒューマンの考えがあり、これには、国を超え、各組織を超えるといった響きありとの感があり、さらに国境を超える世界協調のアベクスがあるだけでも、国際協調の視点がより意識されることになる。これは大変な萌芽になるのではといたい。(本論では地球環境と国際協調を=アベクスとする)

6.2 市民に求められること

いま市民に求められていることを整理したい。

まずは混沌とした社会状況だからこそ、市民による開明的な行動のチャンスが増えてきているとみている。そこでは、市民は俯瞰と深堀をバランスさせ全貌を見ることであり、その一環として、社会の在り方や社会の束ね方が可能となる。また俯瞰によって諸問題について部分的な内容把握を超えて大きな流れの基での理解が実際にはセクスでもって社会を捉えることに繋がっている。

ならば、今後何をどう展開していけばいいのか。それは、市民レベルにて最初から議論をレベルアップさせることが困難でありがちなだけに、各地のコミュニケーションのミエテイで地道な進

展を積み重ねていくことである。以下に基本スタンスを記す。

(1)社会を束ねる思考； 束ねる次元は今後に向けてどんな社会をつくっていくかに関わり、社会づくりとしてのSDGs枠組み議論をもとに市民思考にはパワーと弾みをつけたい。

束ねることと俯瞰については、市民レベルでの各種概念規定として、各種の概念とともに列挙する。

社会との関係性でいえば、権利と義務、視点と思考、社会と市民は相互関係、市民活動の階層構造を超えた行為(足元から上部へ、町から都市へ)、国際的ヒューマンティ構築・推進などがある。

(2)俯瞰； 社会を俯瞰する。そのためには社会を束ねてみることも必要。ケキモデルの最上位について、平和や理念理想などが入るとどうなるか、想像も必要と考える。

(3)セクス； 俯瞰があつて、適切に深堀を伴っていく姿勢が大きな流れとしてのセクスを形成すると考える。

(4)階層構造をこえて； 大規模化・生産社会活動活発化には世の中の階層構造化とそれに見合う組織の論理の構築とがある。そこには街や都市や圏域や国といった階層があり、国際社会はそうした階層構造の上に位置し、国際視点での束ねは英知と国際的取り決めだけ(コミュニケーション)と今のところは考える。いくつか課題を記す。

・街から都市への活動的飛躍があつても、街の論理を都市に入れることは困難であり、しいていえば両者の論理の併存を目指すのがやとくかと思う(それすら困難だが)。

・階層構造を超えるとは、各階層における概念の階層を超えて設定し直すこと。概念規定の広域化を行うこと。

例えば平和。国の中のみで平和を規定するなら、国の中のみで安全と平和のための戦争という概念も入り込む。そうではなく、国際レベルにおける概念規定であれば、平和は各国内にて都合のいい平和を超えて真の平和となり、しかも武力は不要を主張できる。この考えで、正義もセクスも併せて設定しなおしたい。そのためにどうする。階層構造をどう乗り越えるか、今後の検討ということになる。

7. 教育問題(最近の思考事情、7章から12章まで対象)

SDGsでは質の高い教育をと謳って万人の教育機会均等や高等教育の項目が網羅されている。しかしながら、市民感覚では機会均等には価値ありとするものの、高等教育をも含めてSDGsへの現実感が乏しい。理由は、例えば高等教育では「教育は確あるべき」と規定されたスローガンが現実の教育制度を変える程には響いてこないからである。

どうしてそうなるのか、理由は二つ。ひとつは市民が受けている(受けてきた)教育が現実であつて、SDGsの視点には日本の教育制度の改変が当然ながら謳われていないこと、二つには、例えばインフラやデジタル等の問題に関する啓発指導を目的としたSDGs教育において、市民の声で述べた(2章)ように現行教育システムのアウが見え隠れし、教える側もまま引いてしまいたくなることである。

この章では、日本の教育制度について、外部からの点検

、
という視点によって(これ幸いに)検討をすることにした。
扱う対象は、そもそもの教育制度の根幹や最近の STEAM 制度である。

7.1 市民から見た教育制度

周知のように、欧米では教育の教と育を分離させ、教は学校で、育は家庭・地域・宗教で役割分担となっている。これに対し、日本の教育は教と育を一体にした教育ということで、「教え育てる」がスローガンになっている。

これは江戸期から支配層の人間教育を目的としたものを西洋風のものに結合させて明治期以降に実践され、人間育成が国家統制のもとにある(8.2 節) ことにより、国が育を期待される人間像として教と抱き合わせて具象化し、期待する人間づくりのための教育を行った。

戦後には文部省が国を担う期待される人間像を提案したが、人間の画一化が不適切として構想はとん頓挫した。その後、時代が変わり多様化や個性尊重の時代になると、官による期待される人間像は影を潜め、その一方では、産業界は次代を担う人間育成として期待される人間像を打ち出し今日まで続いている。

こうして教育界にしてみれば、二つの宿題が残った。ひとつはそれでも何とか教育スローガンが欲しいことであり、今ひとつは人口減少とともに始まった学校含む地域の縮減化に対応するための「選択と集中」ならびに地域からの学校支援の促進にある。これについては次節(7.2 節)に詳細を述べることにして、前者についてさらに二つの考えを述べる。

教育界ではゴールそのものやゴール方向を示すモノ・コトが必要とのニーズが高く、文科省は期待される人間の進むべき道や具備する能力など(例えばウェルビーイング、リテラシー、創造性能力等)の言葉を並べている次第である。

ではどうする。方法としては二つあり。第一の方法として、進むべき方向でもゴールでも何でもいから、官主導ではなく市民をも交えて行動してみてはどうか。そこには、ゴールや方向でなく、躍動感を持って次の発展を形にすることが考えられれば十分となるはず。こうなれば、官主導でなく市民とともに新しステージが開かれよう。

第二の方法としては(私案)、教育が目標を持って邁進したいなら、期待される人間像の設定を人間固定化にならないように流動的に捉えて、各自の個性や多様化を尊重し、各自で各自の期待される人間像を造(創)れる素養を教育行為として後押しすればいいだけの事である。それこそ真に多様な人間が育成されることになると考える。

7.2 地域と学校を結ぶ

(前節述のように)学校と周辺地域の人口減が結果的に地域で学校を支えなければならなくなってきた。これには、は育の地域機能に対応して、学校を地域に開かれたとするか、地域が学校と融合とするか、という二つの考えがある。

前者については、すぐにできそうな施策ではあるが、地域を構成する人口の少なさが懸念されるものの、一つの方法としては注目できる。しかしながら、その方法では最終的には合併統合の道が待っており、しかも合併域の拡大が却って地域の役割を霞ませてしまうことになる。

後者については、地域が人間育成に寄与するとなれば、それは学校と家庭・地域の融合というべきものである。1980~2000 年に千葉習志野市秋津コミュニティでは「学社融合(学校と社会の融合)」がテーマワークとして実践され、2000 年以降には文科省が政策として取り上げ制度化を進めて各地に広めた。しかしながら、今では、学者融合の理念よりも学校と地域の関りという形態のみが先行となり、「地域に開かれた学校」というキャッチコピーのもと地域主導でなく次第に学校主導となって、地域が育を真に担うことにはならなくなってきた。今後に向けては、学社融合の理念(地域主体)を如何に復活させていくかが要となっている。

7.3 STEAM 教育について

STEAM とは、初等教育の時点から高度技術社会を支えるために特化した教育(STEAM 論; サイエンス、テクノロジー、エンジニアリング、アート、マティクス)の枠組みのことである。ここでよく間違われるのが A のアートであり、文科省は A とは創造的思考法(問題発見・解決のための創造性、デザイン思考、イノベーション)という。しかし一般に社会ではリベラルアートや純粋にアートととる方が多く、しかも STEAM には社会系や人文系などが入らないことに不満が高まっている。こうしたときに、A アートには自由になんでも盛り込み可能なモードが発生して、芸術系、社会系科学、倫理、生活系、法などが実際に盛り込めるという考えも飛び出てくるほどである。

いずれにしても STEAM では芸術を含め社会系・人文系などが分野横断的矮小化の流れの基で軽視され、STEAM 構想の推進が增強されている。これに対して、反論は今だからこそ、改めて教育には社会系など含めて種々の系にてまんべんなく体験・学びを積み重ねていくべきという。これより、STEAM 構想により社会系や人文系が埋没や変質させられることなく、しかも市民存在を基軸に教育を見守っていくよう努力したいものである。

そこで注目したいのは芸術である。芸術は(人間)感性育成そのものであり、生活の上でのセンス醸成をなすものである。これは芸術の枠越え発想・思考と自由闊達な表現により、問題発掘・解決のための創造力についても諸問題の根っこに芸術センスが大きく作用することになる(あえていえば社会的基礎土壌の根幹を発揮する)。

今は高度文明時代。これを支えるには科学技術を先行させてもいいが、芸術の感性が後追い(本当は先導して欲しい)、これに人間が乗っかれば、芸術の存在が STEAM にも波及して STEAM 構造を変える原動力にもなり得ると思う次第である。

8. 社会と個人

ここでは世の中の社会性に関する一般的な概念を個人 vs 社会としてどう捉えられるかを扱う。これは社会を全体俯瞰で把握するためと、「社会における個人」や「個人の社会への貢献(社会づくり)」といった権利・義務の次元で把握するためである。

扱う項目は、市民レベルでも関心が高い事項として、権利と義務、平和、である。これには、著者が数年来手がけている社会づくりである社会的基礎土壌づくりが種々体系の根っこでつながるという土壌のイメージでもって、各種問題を見て行く。

なお、ここでの問題を SDGs と直接関係させないのは、特定の縛りの中での限定した話にしたいからである。その意味ではたとえ地域あるいは日本国といった枠を設定しても問題が枠内に収まらないと考え、世の中の事象を多視野で見るのは当然とした。

8.1 権利と義務

憲法を引き合いに出す。憲法では権利のみが書かれていて義務が書かれていないから、権利のみを主張する方々が増えて困る旨をよく耳にする。憲法は国の行動をチェックする機能が国民の権利であるとしていることが霞んでいるかのようであり、逆に憲法無視の雰囲気は少しずつ強まっている。

では、権利や義務をどう考えていくべきか。もともと権利・義務は表裏一体であり、例えば生存権の義務は生存行為すなわち生存遂行が義務なのである(自然原理の立場でいえば、生存は目的行為である)。また平和であれば平和を作ることが義務なのである。国側は、ここを適度にごまかして明治期のように国民が納税と勤労と兵役を義務とする方向を模索したがるとは、官僚も政治家も主権者国民の代行者であり、主権者の意向に沿うべきなのに、システムの大規模化により、政治を含め(官僚を含め)聖域が活用できるとの思い違いがあるのではなかろうか。

8.2 気になる国民性

市民(国民)は長い間、為政者の支配を受けその中で生きてくると、為政者に声を大にして抗議することがなくなる傾向にあるといわれている。ただでさえ国民国家は国民に(害にならない程度の多様性は認めても)同質を求め、為政者の思い通りに動くことを良しとしているのではなかろうか。それと同時に、そうしてつくられた社会には同質性というものがある排他的様相をもって何事にもかかわってくる。しかもそれは善良な市民の考えをも狂わすほどである。例えば、各種災害の裁判訴訟において、あろうことが被告人が(世の中からもマスコミの方も含め)パッシングされるのである。やはりここに改善の手を入れなければならない。

それにもう一つ。最近日本国の意識構造は世界に類を見ない立派なものを持ち上げる論評が多い。日本語の美しさ、

日本の古代文化、などがあげられるが、その一方では日本人の目に見えず気がつかない排他性があり、世に出回る批判もそこそこ主義(批判ルールいちゃもんゆえに自制)となっていることも多いようである。とんでもない。日本の深層心理である意識構造がこれまであまり議論されてこなかっただけに、上述の事象が霞んで見えなかっただけであるといいたい。議論に際しては、文化、宗教、地域思想、歴史などを基軸にすべきであろう。

8.3 平和論議

日本が過去に戦争で痛い目にあっても、「だから平和は」といった議論を正直あまり聞いたことがない。むしろ、過去のことを忘れて、海外に目を向けているようにも思える。

どうしてそうなるのか。あまりにも過去のことを忘れすぎるのでは。平和教育があるとはいえ、真に機能しているのか。武力で平和が作られたことは一度もないのに。思うところ多々ありだが。

ここで平和論議として一言。市民は開明的な方々とともに、街づくりの理念の拡大で政治づくりとして世直しが期待されている。今後は国内の徹底した平和志向の推進により為政者に対して社会的契約を求めていくことになるだろう。

8.4 高位な社会構造として国の構成

国家論を述べておく。階層構造の高位にあるのが国である(その上は国際社会だが)。階層組織の頂点である国家でも、程度の差こそあっても、国民を束ねるには同質性が国民に求められている。すなわち、国内においては同質性が絶対条件であり、多様はありえないといわれている。このような状況では、国際間の相互尊重、他国の国民との相互尊重や協調などは本来的にありえないという意見も多い。確かに、SDGs の国際的取り組みが大国ファーストのゴリ押しに対し機能不全に陥ることがしばしば目撃されている。

この種のカテゴリの問題をどう解決に向けていくのか。それこそ、他国との平和共存、国際協調、武力行使のない平和といったことは、今の世の中では緊急課題といえるものである。そこまでSDGs が関与することは難しいとしても、SDGs を受け入れる人間の素養がどう大規模系の階層社会に関わっていくかという視点を含め、今後ますます問われてこよう。

9. ウェルビーイング

節 5.3(3)にて述べたが、現行のウェルビーイングはウェルファールにあらずなのに、ウェルビーイングの概念で社会問題を一気に整理しようという動きが加速している。ウェルビーイングにそんな力があるのか。居住、人間性、社会システムを念頭にウェルビーイングへの期待はいかなるものか、論を進める。

9.1 都市や街づくり次元で

(現行の)ウェルビーイングは、個人を基準に生活圏を広げて、社会

、
や地球に拡大。個人幸せが社会における幸せに繋がるというイメージをまとっている。そこでいう社会は、個人の次元から社会に向けなんとなく延長した概念であるにもかかわらず、ウェルビは社会の階層構造には一つも触れていない(最近、触れだしてきたが)。社会における市民生活を対象とするなら、社会システムそのものを対象としなければならないのに、その我田引水的位置づけは実に不十分ではなからうか。以下、二点について議論したい。

(1)街づくりと都市づくり； ウェルビとして個人から社会までを展望するのはいいが、扱う小規模系が拡大して大規模系になった時(社会や都市を想定)、小規模系のリが大規模系で通用可能というイメージがあるとしている。例えば都市。都市には多種多様な機能・役割があり、小規模系と大規模系との相互作用・交流があるので、小規模系が大規模系とはイメージにおいてもイコールにはならない。

ウェルビが街づくりや都市・社会づくりとして役立ちたいという希望があるようだが、街や都市という基本も抑えずして、事を成し遂げられないといいたい。参考までに正攻法では、街と都市の枠組において、街論を都市論と併存させるとか、都市論は別途のモノで良しとの考えがある。ではウェルビは何とするのか。

(2)市民参加； 公害問題、原発災害、大規模都市再開発などに対して市民活動のパワーは絶大である。しかしそれでも、運動家以外の一般市民が動くにはより大きなパワーが入用であり、このためにも、市民の基礎力の醸成が求められる。残念ながら今のシステムでは、市民が大手を振って対応できるのは選挙の時であり、行政の管轄下における市民参加システムである、パブコメ、市民向けWS、市民会議はまだ機能的に不十分である。また、企業の生産に対して異を唱える場合は、市民は不買運動くらいしか選択肢がない。こうみてくると、諸問題に対して、社会における市民生活の安心安全確保が基本として、社会的基礎土壌が地道に積み重ねられていくべきである。市民の今後の活動に期待したい。なお、この種の問題に対してウェルビは何も答えていない。

9.2 人間育成の次元で

ウェルビを唱えている(いくつかの)地方自治体の施策について、人間育成の視点が霞んでいると常々思っている。各地方では、フューチャデザインとして将来を設定して現在をどうするという方法を適用するといっているが、そこには人間形成の視点が霞み、単にウェルビによるムード戦略導入で行きたい旨の自治体の本音がさらけ出されているとみている。

そんな状況を見ると、ウェルビには賑わい創出というスローガンがあり、これが人間だれしもハッピーまでもっていくとの心意気が単なる外見上のハッピー様相を追いかけ過ぎているだけであり、なぜ人間育成まで考えることを避けたのか、なぜ地域全員(国民全員)のハッピーまでもっていくのか、何が問題か分かってない、というように見える。

ウェルビの幻想モードが虚勢を張っているなら、著者はその

観点で社会における人間育成の問題を論じたくもなる。ここに持論の展開として、人間を育成するには教育のシステム整備の前段階として社会と人間との相互関係性が人間活動と人間育成を共になしえることを説明する。以下に人間育成の個人と社会の関係性を記す。

(1)ウェルビ概念を個人から社会へと次元拡大； 今は個人レベルのウェルビが社会のウェルビあつてのものとする段階にきている。社会レベルと個人レベルとの相対関係がシフトして社会の一層の充実が図られるべきと考える。

(2)「持続可能性を超えて世代間(連続)継承発展」； 人間は世代間連続性でもってバトンを如く人類遺産を継承発展させていく。各世代では世代内にて10年程のspanで連続的代謝が図られ、新世代には役割交代を通して人間社会が新陳代謝すると考える。

(3)足元からの市民行動が問題本質に接近； 世の中の諸問題では、国、自治体、企業、等の取り組みもさることながら、街レベルや個人レベルからの活動も大きな力を発揮している。そこでは個人の問題として自ら日常的かつ身近に動くことにより取り組みがより自分事となると考える。

(4)社会感性の各種環境下での形成； 「人間は環境をつくり、環境は人間を育てる」といわれるように人間と環境の相互関係性から人間の感性が磨かれ、社会の感性へと発展していくと考える。

(5)生活の営みは個人と社会との繋ぎ； 生活の営みである人間交流や人間活動等について、コミュニティを介し個人レベルの事象が社会へ積み上げられ、また社会から個人レベルの働きかけが基礎素養の育みとなり感性・理性や基礎力が醸成されると考える。

(6)便利さと人間性とのバランス； DX等テクノロジーは個人生活や社会における効率化を図る上でも今後さらに進展するだけに、地域思考には足元の地域・人間の範疇から自然環境や地域環境が背景となっている。またテクノロジーに関してはまず足元の地域環境において人手テクノロジーをハイテクとバランスさせたいと考える。

(7)まとめとして人間育成の社会での展開； 人間育成についての思考を如何に展開するか。今日的な社会状況として、人間の在り方を設定する事から始まり、人間の生活(市民社会生活)の営みをどう確保するのか。そこには日頃の身の回りの生活の充実が目指されることになり、最近のテクノロジーとの関係性も人間中心に、行政にはコミットを介して真の市民参加が図られていくであろう。そのために、市民は日常活動(例:コミュニケーションのコミュニティ)を通して、市民・社会ともに社会の意識をつくり、いわば市民による社会形成を目指すべきと考える。

9.3 誰のためのシステムか

最近、民間の組織や国の省庁でも、成長路線とウェルビとを抱き合わせて、働き甲斐のある個人の自己実現やこれにともなう社会の創出を可能にするというスローガンのもと、

、社会全体がウェルビーイングの風に乗って動き出している。ここにきてようやく、個人レベル以上に及ばず組織や社会のレベルでも、ひとつのありうるべき姿(種々事象における満足度を向上させたイメージ形態)が提示されるようになった。そこでは、リードは一見バウ色となったが、果たしてそうなのか、検証したい。

そもそもウェルビーイングの導入の理由は、(生産に関わる)個人の力量ややる気を最大限発揮させることが生産性を向上させるとしている。もちろん、ウェルビーイング推進側(使い手側)は、(使われて側にに対し)生産向上とはいっていないが、好きなことを仕事に、かつ自由に働かき方を設定して行動することがウェルビーイングそのものであるとしている(これを幻想とする意見も有)。しかし、その背景なるものが現社会システムを変えずに、使い手側と使われて側の共にウィン・ウィンの関係を目指すとしている。しかも、この一大運動の背後には心理学(人間啓発のための理学としてポジティブ心理学の分野を生み出し活動)が今後のAIやビッグデータとの連結により、さらに大きな役割を演じようとしている(10章参照)。

こうしてウェルビーイングの様相を述べただけでも、問題点が浮かび上がっている。第一は、使い手側と使われ側のウィン・ウィン関係の設定である。これは短期間ではバウ色に見えるかもしれないが、そのうち矛盾を噴出するであろう。なぜなら、現状の社会システムの中でイバや気力全開は単なる現状改善の一環であり、社会システムの根本改善に踏み込んでいないことより、いずれ限界が訪れると考えるからである。反論としては、確かに組織内でのウェルビーイングを目指したコミュニケーションや(組織の)縦横斜め串による関連強化の再構成が設定され、組織全体で経営側も含め全組織的な対応はこれからという。しかし内情を見ると、経営側は使われ側が効率よく自発的に働いてくれれば御の字なのである。こうしたところに、働き側だけを対象としたウェルビーイングのアプローチの限界があるといえよう。よって、社会システムをも変えるのは経営側主導でなく市民主導のもとでウェルビーイングを活用するのか、あるいは哲学思考でユートピア的にウェルビーイングを達成させるのか、といったことが今後選択されることになる。

10. 科学技術について

人間はメンタルと物質の両面で満足を追求。このうち物質については、人間の欲望と直結するかのように進化のスピードが早い。ここではAIと農の工業化(工場化)とに着目する。

10.1 AIについて

(1)一般におけるAIの様相: AIについては、最近は過度に進化していく科学技術に振り回され気味の人間の存在が大問題として論じられている。これに対して、SDGsは技術進歩や人間能力には直に触れてはいない。理由は、誰でもが参加し行動できるSDGsであるので、どんな状況であって当然受け入れるからである。これが、科学技術の進歩とか恩恵を受ける人間の在り方とは、を結果的に不問にせざるをえなかったのであろう。

それにしても、AIの進化は留まることを知らず、二分野において暴走が懸念される(暴走はAIでなく操る人間という)。ひとつは市民社会でのAIの運用であり、AIが人間能力越え、人間にとって代わり、人間がメカベースの世界に追いやられる懸念である。

今一つは、世界の安全保障の分野でのAIである。AIが各国の安全保障やGAFA等の利益独占に関わるといった国際次元のものとなっていることである。こうなると、国際レベルでの取り組みとなるが、地域紛争一つ解決できない国際的調整がほとんど難であるとしきれないようである。それでもとなれば、新状況を踏まえてポストSDGsが受けて立てるのか、SDGsとは別の枠組みが待たれるのか、近未来に向けての方向性が問われてくる。

では、市民レベルでは安全保障の問題には何もできないのか。自治体を動かし、国を動かし、世界に提言といったことに市民は尽力することになる。また、市民社会に入り込むAIについては、市民がAIを使いこなす(AI制御)もいいが、AIの恩恵を受けることなく生活をするという気構えも時には見せなくてはならなくなりそうである。これが世界的潮流の基礎となる可能性もあろう。

(2) AIについての市民と専門家: AIが人間の能力を超えるのも時間の問題として、情報系以外の工学系も含め社会科学系では人類の存在が困難になると警鐘が鳴され続けている。しかもこの問題には、生活者の次元をはるかに超えて、世界をリードする大国の思惑も内在している。

ここでは我らの世界に関わる様子について言及したい。我らの日常では技術のあり方議論が花盛りだが、これに対し情報研究者・技術者の多くは、人間がAIを制御できるかななどの人間存在については十分に議論していないという。彼らは冗談めいて、AIが人間にとって代わり、人間がメカベースの中で生きればよく、そのための人間生活支援としてベーシックインカムがあればいい、という。ベーシックインカムの分野においてさえ、人間の生きがいやをどう考えるかが論議の中心であり、技術の過度な進歩のツケを回さないで欲しいとの声が聞こえてくる。

そうしたなかでも、専門家はわき目もくれずにまっすぐ深まりを目指していくかのように専門にのめり込んでいく(ことが多い)。だからこそ、市民の方々はいうに及ばず社会学系の方々(いや社会全体で)と共に、人間存在・社会存在問題について、専門家に向け何らかの働きかけも必要と主張されている。その準備として市民と専門家という枠組みで、社会におけるあるべき姿がつくられていく。

(3) AIによる超合理化時代に向け市民はどう対処

AIによる社会システムの超合理化により、その恩恵は莫大であるとされている一方では人間の能力越えの指摘もあって、期待と一抹の不安が入り混じり、AI論議もその2点ばかりがクローズアップされている。果たしてそれだけが問題の本質なのであろうか。

まずは、社会がAIをどう捉えているか、AIに何をさせ

、
るか、AI のある社会をどう描いているか、そして最も大事な
のは社会の主人公である市民が AI をどうみているのか、
AI にどう対処していくのが本質ではなかろうか。

次いで AI の社会実装において、社会の AI 推進側が主導
して開発・実装されてきているが、その目的は世の中の進
歩・合理モードを介した超合理化であり、社会システムそのもの
の変更を求めるものではなく、ましてや市民主人公の社会
づくりとは全く無縁である。しかも、市民は社会推進側が
押し進める人員削減・人件費削減の対象となり、質・量増強
の生産品や増強のコンテンツ等による物質文化のモードに溺れる
ことにもなる。これでは、市民の主体性が益々霞み、人間
不要の矛先は市民であるとの懸念が増すばかりである。

なぜそういうことになるのか。理由は簡単。今の社会シ
ステムそのものが推進側の利益に供するからであろうか、AI シ
ステム運用が推進側の(独占的)意向に沿うこと自体が大きな
問題である。

ではどうする。超合理化時代においても、社会は市民(人
間)と共にあり、社会をどう扱い創っていくかは推進側が
先行したとしても、本来は市民の問題として市民が社会づ
くりの意識をより高めていくことである。となると、街づ
くりの川で、地域づくり・社会づくりを生活の営みの観点
で充実させていくことにより、AI には市民側存在の活用
の道に関与させ、市民や開明的な方々とともに生活の営み
の視点で人間主導が如何に確保されるかにかかっている。
我らは市民主導の社会意識づくり・世論づくりという文化
相創生を社会系・人間系とともに積み上げていくしかない
と考える。

10.2 農について

グリーン系や日本立て直し系でも工学や技術の在り方につ
いては、環境改変(破壊)により人間が傍若無人に振る舞う
のではなく環境をいたわっての農というスタンスが明確にさ
れている。このことは人間が農と共生の関係にあって、か
つ自然界の中で伸び伸び自然の恵みを享受する生活が望
ましいとされ、これまでは業としての有機農業、自然農業、
共存としての自然栽培がその任を担ってきている。ここに、
人間は過度な欲望を押さえ、自然と共に生きることが未来
の人間ということと解釈できる。グリーン系や日本立て直し
系はまさにそのことを真剣に取り組み始めている。

しかしその一方では、そうした共生社会も科学技術の導
入により、生産量増大、労働力減少、天候に左右されない
といったモードの反映となる農工場による生産を自然現象
からの解放された農業として実用化の研究が進んでいる。
すなわち、真の共生路線に対して、あくまでも科学技術駆
使の工場生産の経済活動が目指されているのである。

この動きに対して SDGs 運動は明確なビジョンを持ちえて
いない。理由はすべての方の参加する農業では「共生あり、
工場生産あり」ということになるからである。

折角ならそうした動きに対処して、自給バブルを基軸に農

と人との共生という新たな分野が切り開かれて欲しいも
のである。(一言、背後には牧歌的な雰囲気に関心であ
り、かつ天候に左右されない農業に挑戦したい(一部)農業
研究・技術者と農業を利益対象とする経済人とが先導して
いるので、だからこそ自然との共生の意味を皆さんで考え
るべきかと)

11. 子育て・高齢者の問題(世代間生育として)

11.1 問題の世代間展望

一般には、若者、老人、といった問題はそれぞれ独立し
て扱われているが、ここではそれぞれの問題を同一土俵に
乗せるイメージで世代間生育として束ねてみた。理由につ
いては、人間集団においては、若者がいて子どもが授かり、
子どもは親を見て育ち(親は子どもを育て)、親は子の独立
とともに老の域に入り、といった人生サイクルが根っこでつな
がっているとしたからである。

これによって、SDGs のタスクフォース的な構成とは別に、人間
の絵巻模様の捉え方としてここに世代間の論を記した
い。すなわち、人間の人生絵巻模様を理屈付けとして、人
間生育様相を世代ごとに論述し、その後に総合的な視点で、
問題を俯瞰することにする。

まずは各年齢層(各世代)における日常を記し、次いで世
代間の発想で論を進める。

11.2 若者；

(1)若者が地元(田舎)を離れ、新天地都会へと流れていく。
理由は、地元には就職先なし、賑やかさ無し、魅力なし等
に加えて、目立たないが地元の保守性や若者への自由制限
(人間関係や他者配慮の硬直化)にあり、若者は誰からも束
縛されないイコール都会志向に期待を寄せていくのである。

さらにいえば、若者の根底には人間関係の淡白さ(貧困
さ)に起因する自由な憧れ・希望があり、逆にいえば地域の
様相が若者にあまり魅力に映らないばかりか、魅力づく
りの意欲が育ちににくいので、意欲疎外の要因排除は社会
として取り組まれるべきかと。そうならば、若者は地域に例
え住まなくても、都会と田舎との間で気脈を通じさせ、地
域の活気を取り戻すという方法も可能となろう。

(2)都会の青年においても；項目(1)と状況は同じであり、
今の時代、生誕地離れには人間関係のわずらわしさが一面
にある。これを煩わしくない人間関係に変えれば、別居同
居関係なく地域・県・全国での居は可能と見ている。

(3)若者が結婚したとしても；項目(1)と関連するが、異性
との結婚ができたとしても子ども不要を唱える方も少な
からずいる。彼らは、子ども育成のプラス面よりも子育ての大
変さを子ども時代から親の多忙な姿を見て感じているの
である。今求められているのは多忙により蓄積される
世帯でのストレスをどう解消するかであり、この面からも社会
環境改善がまずは目指されることになる。

11.3 親世代；

子育て・子育てに関わる親について(健全家庭も多いが)、二種類のケースで今問題となっている家族の一般論を記す。問題は親の姿勢にあり。子育て・子育ての前にまずは親が変わるべきといたい。

(1)余裕のある家庭； 子ども第一として、親の頑張り住まいや子育て・子育ての環境のバブルに現れ、子への教育投資・行動投資や学力アップへの関心が高い。これにより、親は我が子がある有名になって上位グレードに居ることを期待し、子どものための情操的・感性的教育には無頓着となる。しかも、最近の新しい価値観の教育にも関心を示さず、例えば森の幼稚園や子ども主体の夢見るスクールなど見学した親は新教育理念について理解するが、子どもが心身とも健康に成長するよりも、格差社会で生き残れることを希望しているのである。本来は、格差社会の是正を目指し親子が頑張るのではないのか。子どもにとっては心身健康で今後の時代を担うことが親に理解されれば世の中、根底から変わっていくものだが。

(2)余裕のない家庭； 男女共働きの場合、最近は働き方改革として共働き支援がかなり進んでいるが、問題も多い。第一には、働かざるを得ない環境の改善が未だ遠いとして、働き方改革が働き方改革と受け取られることである。第二には生活費稼ぎの勤労が生き延びるうえで必要であり、余裕のない家庭では子育てどころではなく、時には家庭崩壊・家庭不和が発生してしまうことである。ならば根本解決には、働く者への財政的な支援に加えて、(働き続けさせる旨の働き方改革に潜む)日本古来の勤労美德観を改善するといった方法が必要といえる。

11.4 高齢者問題；二種に分ける。

(1)初老期； 子どもの成人前や成人後の親離れにより、同居別居問わずいわゆる壮年後期を経た初老夫婦が老の予備域に入り、社会的営み(就労)をリタイアすると、一気に老の世界に入り込む。そこでは社会との繋がりをどう図るかが問題となり、社会全体で高齢世代の生きがいとして種々対応が社会福祉として用意されている。

その一方では、定年延長や老後のアルバイト可となった時代では、勤労意欲(日本古来の勤労観)の慣習もあって就労には社会貢献の就労や生活費稼ぎ含めの就労が可能となった。反面、初老期から町内会活動などの地域活動に精を出す時間的余裕がなくなり、地域が機能しにくくもなっている。こうした風潮がしまいに地域はどうでもいいの観念を広げだしていく。人間にとっては、勤労意欲や地域貢献が意欲的になるよう、それこそ地域老人版の働き方改革が老人を中心に進められればと思う次第である。

(2)要介護高齢者； 高齢者は病気有無に関係なく老齢化の進行と共に介護要となって、介護福祉施設に入所することが通例である。その背景には、マシな状況として家族が自宅で要介護高齢者(この節のみ単に高齢者と呼称)に対応困

難となっており、プラス状況としては社会が高齢者に対応すべきとの社会的理解がある。また、対象高齢者自身も自宅介護を希望するが、社会の集团的施策に期待していることである。

しかしながら、日本の場合、高齢者は家族に遠慮し付度するようになり、家族の支援を適正に見れなくなるばかりか、先々の希望が感じられないようになっている。これについては家族のみならず社会の底流にある意識がそうさせるのではと危惧している。人間の尊厳を失わずに最後まで、といった想いが叶うよう介護福祉施設の充実が図られればと思う次第である

(3)まとめ； 社会福祉の基本は高齢者に希望の持てる生活環境をつくることとされている。しかし実態は、社会意識の問題に加えて不十分な政策が福祉施設の充実や福祉要員の確保をかなり難しくし、結果としてきめ細かなサービスが実施困難となりがちである。より改善を望みたい。

11.5 働き方について

(1)企業では、 育児休暇については男性にも認められるようになってきたが、実態は厳しい状況にあり、職場をよく休んでいる男性社員はリストの対象となり、これに会社内の歪んだ雰囲気が拍車をかけ、退職者の増加へと繋がっていく。お金よりも制度改革をといって制度ができて、会社内のもとと歪んだ勤労意識のあるところでは、歪が合理的なリストを誘発させている。こうした不条理が批判されているが、まだまだ先は遠い。

また企業にしても、抜本的対処は難しく、小手先での対処が多いのはそうするしか方法がないからである。その点、大企業はそれなりに健全ともいわれているようだが。

ここで男女参画問題として論じてみる。社会システムとして法令で男女参画推進が謳われているが、現実の社会、特に現場では、男女参画とは名ばかりに近いところもあり、男性育休にしても何度も活用している人にとっては退職が待っている。社会システムには法的に反したことがまかり通る風土があるということは、社会システムは歪んだ風土を温存しているということである。ではどうするか。市民活動に頑張ってもらったと同時に、深層にある風土を壊す市民側の社会的基礎土壌の育成をより積み上げていくしかないと考えている。

(2)国では、 国民に勤労を求め、働くことイコール美德の風土をつくってきた。そこにあるのは、働き方改革ではなく、働き方改革であり、社会は労働意欲向上を僅かであっても強いている。だからこそ我々は、人間の自由や尊厳までもが大丈夫なのかと心配し、楽観の声として「いやいやまだまだゆとりあり」には現実の奥を見るべしといたい。

(3)子ども育成、高齢者、弱者問題、等、 根本的解決は法令とともに社会慣習の改善がある。もちろん、国や自治体でも、日夜頑張っている方が多いことも申し述べておく。言いたいのはエッセンスワークと共に、社会制度を改めるくらいのバリ

、
で問題解決として社会慣習の改善を目指していきたい。

11.6 人間の世代間生育のまとめ；

人間の世代間生育を若者系と高齢系に便宜上分けて、その充実の様相を見る。

まずは若者系。親子世代の生育について事象を列举すると、若者の結婚願望の増加、子どもの健全な育成(ひいては人口増構想に)が基本にして、社会からは子育て・子育ての支援、若い方々の結婚に至るまでの支援、さらに居住環境・教育環境の整備、魅力ある地域づくり、がある。

次に高齢系。若者が郷里を離れれば、高齢者の地域における相対的増加は必然であるが、それでも、若者の少ない地域においても若者はしっかりと地域を守り、また高齢者自身が希望を若者時代から延長させて生活の営みに奥みをつけている。これを実現させるよう社会からの側方支援は当然であり、関係機関のさらなる努力を望みたい。

以上のように見ると、改めて気づくことは人間の世代間生育を(底流で)支える社会的環境の大きな役割である。これは、生活環境の社会性が人間に及ぼす作用が機能した結果のことであり、その役割を担うのは生活の営みの器である建築・街という生活環境である。すなわち、建築や街という環境において人間の生育と共に生活環境が社会性をつくり、人間と環境との相互関連で生育が充実していくのである。

具体的には、まずは魅力ある街づくりとして物理的経済的な街の活性化と共に、人間環境として若者が子育てに邁進し、子どもの育ちに力強さを増す。次いで、そうした人間の営みを基礎に壮年や老年の方々が自らの生きがいを感じ、高齢者となってからは人生の総集として歩む環境を創っていくこととなる。そんな意識環境を皆で創り(社会にも定着させ)、そんな世代間環境でもって皆が元気に振る舞うこととなる。

12 人口減少社会における諸問題、

人口減少、空き家、過疎・過疎地

日本全体において、近年の急激な人口減少により、都会や田舎を問わず空き家が増加し、田舎では過疎地が急増している。SDGs では住みよい街づくりが項目に上がっているが、上記の問題に対して有効な対策が打てず、これからといったところである。

12.1 人口減少問題

このままでは2100年には人口半減も囁かれる危機的問題を11章と関連させて扱う。

a.第一として一般的事象について； 人口減での困りごとは国の消滅まではいかないとはいえ、減少する就労者(主に若者)が相対的増となる高齢者層を(経済的に)支え困難になることである。しかも、人口増の諸条件が勢ぞろいして対策を取っても効果が現れるのは少なくとも10数年先

である。よって、取り組みは、安定人口をめざす前哨となる人口安定までの過渡期における対処から始めて継続的な施策を講じることになる。その間(それ以降もありそうだが)、子ども誕生促進の支援金支給の施策、過渡期・安定期での移民による労働力不足対応という施策などが入り込むことになる。周知のとおりである。

b.第二として人口増をめざす社会構造について； 人口安定に至るまでの社会構造と安定期の社会構造について、対応の基本は人口増である。人生絵巻の10章で述べたように、若者世代、結婚成就、子ども誕生、子育ての各ケースでは、補助金支給も大事だが、基本は物的満足よりも精神不満足であることにもっと着目すべきとする。

物的満足に関する補助金施策などの論はその道の専門家に任せてここでは割愛する。これに対し精神的満足の範疇の問題としては、社会の意識構造論の出番であり、長時間的(歴史文化の次元)には文化や慣習や、短時間的(現代の次元)には社会全体における総駆り立て体制・社会的歪み、等がある。

上記項目aについては、11.5節で述べたように例えば働き方について、制度では男女平等が謳われているが、実質は勤労美徳の精神が未だに現社会に衰えを見せず、これがために苦勞されている方が少なからずおられる。

上記項目bについては、問題の重要性に対し、社会全体で長期展望や理念理想を垣間見ることが極めて少ない。これに併せて近視眼的思考が総駆り立て体制と相まって、市民を同質行動化(多樣的進歩的様相を兼ね備えて見える行動)させることが、社会思考をポジティブに発展させないよう作用させているのではないのか。

ではどうするのか、政治面からの施策や済面からの施策はいうに及ばず、市民社会を覆う文化や慣習などの封建的な面や市民の同質行動化の面を何とか取り除きたいものである。

そこで持論だが、市民の素養アップとして社会に置ける危惧事項を論議題材にして、日常生活の営みの健全さを積み重ねていけば、事は変わりうるであろうし、社会的基礎土壌が醸成へと繋がって行けばいいと考える。

12.2 空き家問題は既存街の風情保持や都市系的視点で対処

空き家問題については、SDGs が空き家にも対象を広げているわけではなく、建築系が建築系固有の問題として扱っている。とはいえ、街のサステナブルの観点からも取り組むべきとして、ここでは上記の題の観点で論を展開する。

(1)現状； 空き家は、社会の機能や居住生活の機能に対応できなくなっていることにより発生している。空き家の現状については、空き家再生(リバ)や現状維持)や空き家や解体後の土地活用といった対応もあれば、空き家放置が固定資産税対策で依然として多く、地域の生活環境の悪化を招いている。周知のとおりである。

(2)これまでの空き家問題への対応について

a.第一には、生活様式の今日的対応としてリハ¹での対応がある。今の建物基準で性能に合わせたリハ¹は割合高コストとなるので、リハ¹でなく新築を選択することもある。また、伝統建築的気風のある建物では修繕で対処することが多い。

b.第二には、入居者家族には、世代居住から(核家族化から大家族制でなくても)中家族制への移行を目指すものもある。これには生活様式の多少の一元化代が目指されるので、これを窮屈な考えとして避けたがるのが今風である。そうだけでなく若者世代の就労地選択等がネックとなっている。

c.第三には、空き家の需要を伸ばすこと。求める方(買い手)と求められる方(売り手)とのマッチング²のシステムの整備が進んでいる。なお、建築系の各団体や企業並びに行政には、空き家問題を検討しており、これらが行政を中心にして連携するようになってきている。

(3)景観を含めた方策: 上記方策はもちろん要であるが、問題を地域風土(景観)と関連させてバリエーション³で検討したいものである。これには二点あり、一つは地域風土にマッチした空き家のリニューアルであり、今一つは更地化の利用として地域風土づくりがある。両方とも、街づくりの観点からできるところはできるようにしておきたい。以下に述べる。

a.第一として地域風土にあう空き家の再生； 空き家の新規入居者による(リハ¹含め)再生蘇りには、街の風情との調和が家にも宿るべきかと。その意味では建築協定をこの際に設定するとか、すべに設定で有れば肅々とした遂行を、ということになろう。

b.第二に解体後の跡地の活用； 跡地利用としては、ふたつの方策がある。一つは、駐車場や(項1とダブルで)住宅用地への転用であり、今一つは地域公共空間として公園やスポーツ緑地⁴にすることである。

これ(後者)については、スポーツ緑地を地域公共地として増やし、各スポーツ地を(点在地としてもこれをあたかも)繋ぐようにしたい。イメージとしては、都市の場合なら過密が中程度の密になり、道に沿った花壇が添えられるなら、スポーツが面的や点的に地域を和ませるであろう。また家庭菜園の場にも提供できれば、これが地域計画の3版なる地域公共としていいであろう。

しかし、問題もある。それは、誰が費用負担するかである。これには固定資産税の低減や割引を行政の方で実施もしくは(行政からの)スポーツ運営援助金を、と思う。管理運営については、所有者が主になって協力者と共に、緑地づくりに精を出す、ということではどうか。もちろん町内会からの支援もありうる。

そしてまた、スポーツが地域の安らぎの場として全地域民に好印象とし働くであろうし、またこの観点からの地域環境の世論が盛り上がるように、それこそ建築系が率先して行動して欲しいものである。

末尾に一言、土地利用にはあくまでも地域公共系を念頭

に置くので、空き地が例えばすぐに太陽光⁵の発電所用地といったようにはならないようにしたいものである。

12.3 過疎・過疎地問題(一か所もとり残さない)

ここでは、居住の面から格差社会で不利益や存亡危機を強いられる過疎問題を扱う。もちろん、SDGs⁶では扱われていないが、問題対処にはSDGsの精神の一つである「一人もとりのこさない」を「一か所もとり残さない」とし、これをモットー⁷としたい。SDGsについてあえて言葉を足せば、SDGsがすべての問題を網羅する必要はなく、SDGsの精神が世に定着しているなら網羅外にもしっかりと伝わって影響を及ぼしてははずだから、この理念に期待したいといったところである。仮に、そんな期待が生じないなら、今のSDGsを再考すべきであり、ポストSDGsにしてもしかりである。

過疎は地方の田舎における問題とされていたが、今や人口減少社会における日本全体の問題となっている。特に一極集中の東京のみが人口増で過度に繁栄し、他の域(地方の中核都市においてさえも)はすべて人口減となっている。またそのあおりを受けて田舎の方ではさらに過疎が進行している。いうまでもない。

かかる状態において、近年の地震災害では機能集中の脆弱さが露見するにつれ、国・自治体の政策は「選択と集中」路線に加えて分散居住とか分散域ネットワーク⁸の構想を検討しだしている。(その一方では大規模な「国土の選択と集中」による東京から大阪までのスーパーカリジョン⁹構想もあるが)

要は、各県ごとに中核都市・周辺都市の関連化を進める一方、他域では消滅を待つのではなくネットワーク化も視野に入れ始めたのである。この動きは、能登半島地震2024で被災地からの住民や自治体の悲鳴もあって、ようやくといった感がする。

ではどうするのか。まずは、過疎地を繋ぐネットワーク化に加えてモジュール化すなわち小規模拠点化が要となる。そこではライフライン(電力、ガス、水、下水などの)が地域小規模ライフラインに代わり、また必要な各種情報サービスはIT等のネットワークにてということになろう。

次に、地域での生産活動の充実を図る。過疎地では、農や林の業に加え、新規の業として観光や特産品開発などが進められている。

三番目として過疎地住民の住まう魅力づくりを図る。過疎地の住人が世代を超えて永続するには上述の居住条件や経済的要件に加えて必要なのは精神的な要件である。これには、過疎地という自然環境と社会環境を合わせた人間環境において、生活の営みが心身ともに納得して身に着けていけるかどうかポイントであり、居住への誇りはそうしたところの結果と捉えられる。

もちろん、居住については過疎は我慢の世界とか、都会は快楽の世界とかをいう即物的な理屈論ではなく、居住はどこでも同じポイントにあり、結果としての様相がそれぞれの環境に合わせて特徴化している。すなわち、居住文化の

成熟は、住めば都を慣れの集積とするのではなく、種々環境のもと環境に合わせるだけのものでもなく、住まいという一本の理念が先行するといいたい。

あえていえば、過疎地居住も都会居住もベースとなる環境のなせる業として、住むことへの理解が一緒であるので、その意味でも都会からは過疎を応援して欲し、過疎はそんな都会に応え、田舎の風を都会に送り込んで欲しい。

こうしたことは一朝一夕にできることではなく、やはり居住文化としてレベルを上げていく取り組みが今後必要であろうし、こうすることによって都会からも過疎への移住が何の違和感もなく可能になろう。

13. 人間の過度な欲望

前章(10 章)の科学技術のところでも述べたが、人間の欲望についての議論は最近までは遠方にあった。理由は、科学技術の進歩が欲望の達成であり、人間の幸福に寄与してきた、とされてきたからである。最近では、欲望の評価論が幅を利かせて、欲望は人類の新しい世界を切り開く利器であり、人間個人にとっても諸行動の動機になりうるとなっている。

これに対し欲望抑制の方々は、公害、災害の激甚化、原発災害、AI 進化、などについては欲望が発端ではないのか、欲望が環境を簡単に変え(人間性を変え)、技術進化を加速させている、と主張している。

そこで科学技術を使う人間には、欲望云々の前に、情緒性や自然・社会の懐の広さの次元に立ち帰ってみてはどうだろうか。ここでは欲望論に言及する。

13.1 欲望の現状

最近では、科学技術の過度の進化により、欲望は果てなく大規模かつ広域化してくると、もはや近代前のような欲望拡大は今なお必要とはいっておられなくなっている。こうした状況においても、欲望抑制はどちらかという個人次元の範疇であり、企業をも含め社会全体には形になってはいない。

SDGs についてもしかり。どう見ても欲望抑制が叫ばれてもいいように思うが、そうではなく現状の路線で「欲望+弱者支援」は可能として、事が推し進められている。

そんな SDGs であっても、途上国の飢餓や貧困といった差し迫った問題については、その根底には先進国中心の浪費のツケ(エネルギーや金属資源の供給先が途上国)があるとしている。また環境問題、気候変動問題も、先進国の経済市場主義のツケが地球全体に及んでいることは周知の事実である。

最近では、人類が自然との共生を忘れ、傍若無人の振る舞いが自ら人類を窮地に追い込んでいると指摘されており、問題は深刻さを増すばかりであり、人間存在のピンチや思考停止ぎみとあいまって「文明人のミラル貧困」も取りざたされるようになってきた。こうしたことは SDGs 運動の対象

に入ってきてそうである。これが SGGs の新たなゴールに追加されないよう、今からでも着手すべき緊急の課題ではなからうか。

13.2 物質文明と精神文化

これらは現代技術社会において急速に問題化されてきている。人間は物質的満足と精神的満足を得ようと日夜努力しているが、最近は見えざる手により人間の精神が意図的に特定方向に向けられそうな状況にあり(あるとともに)、精神よりも物的満足度優先の技術が人間不要論まで引き起こしかねない状況にある。

すなわち、AI の能力が人間を超えたのではといわれるくらいの進歩により、人間の存在がすべて AI に置き換わり、人間不要論が現実味を帯びつつあるとされている。

その一方では、以前(AI 以前)から人間疎外の問題として、社会に関わる人間の同質化や SNS などのコミュニケーションによる弊害の真ただちにおいて、AI による人間疎外が入り込んでくると、どんな展開が待っているか大変危惧されている、しかしながら、そこまでの論評は少ない。

このように、人間にとっては存在のピンチというべき時代の到来を迎え、我らはどう考え、社会全体でどう対応していくか、近未来の課題は余りにも大きい。

14. それで市民は想う

市民が社会の主人公であり、そこに専門集団による社会運営のアシストという構図は当たり前ではあるが、時として市民よりも専門家が主導すると一部には勘違いされがちであり(これに諸権力システムが加わり)、専門集団のみで事の決着が進められることもしばしばである。国政しかり、自治体活動しかり。最近では市民参加が謳われてきているが、それでも(社会運営)推進派が主体であることには変わらない。いくら市民のためにといっても。こうなると、市民には不満が増えるか、「慣れと諦め」でおとなしくするかどちらかとなってしまう。

市民復権を願うならどうすべきか、市民の不满から市民層の様相までを観察するだけでも、かなり前進といいたい。そんな主旨で市民層の様相について、章を設けて述べることにした。題材は、基礎土壌、機能集団のもヒューマニズム、社会性とセス、等である。

14.1 社会的基礎土壌

a.概要； 社会を市民側で変えていくのは市民の感性から成る体系(社会的基礎土壌)である。これは、市民にとっての活動・学習・勉強の土壌等であり、日常からの社会との相互の働きかけあい蓄積する英知・感性としている。これをもって、社会における市民の意識が多様なままで総体となって社会意識を形成するともいえる。著者は意識のみならず行動をも加えて社会のいわば基礎的な土壌とし、意識アップや行動の先鋭化には社会的基礎土壌を耕すといったイ

、
メゾで捉えている。

b.詳細； 基礎土壌を市民中心で述べたが、実際には社会における基礎土壌が対象であり、そこには専門家の役割も大きい。専門家は社会意識や基礎土壌についても種々提案しており、市民啓発として市民層の意識にも関わっている。市民は専門家からも学び、市民は自らの気づきも織り交ぜながら、そこには市民からの感性(センス)による脈絡化があり、また専門家からの理論構成もある。これらが相まって俯瞰と深掘りの様相で行動と思考が磨かれている。

こうしてつくられる市民側の生活知・市民知・現場知が社会的基礎土壌と呼ばれている。(市民運動には活力の泉、体力の源があり、土壌そのものにも市民の足跡として感性が沈着し、ここにも「市民参加の源」があると考え)

14.2 機能集団にも基礎集団的なヒューマンに雰囲気

市民には基礎土壌があり、これが社会全体をも代表する考えると、いわゆる世論との違いにも言及しておかねばならない。もともと社会推進側論理が世の中を染め上げているといっても過言ではないくらいに社会に向け主な世論を作っており、これが時として市民側(の世論)とぶつかり合うこともある。これは推進側と市民側との軋轢であり、このようなことは国や自治体レベルさらに企業や各種団体に対しても見られる。

これをどう捉えるか。何度も言うように。これが大規模系の組織論と、(企業内の市民を小規模系と置いて)小規模系の市民論理との抗争である。当然ながら、大規模系維持のための組織論理があり、その方向に物事は動く。

ではどうするか。階層構造と組織から検討する。人間の所属集団は基礎集団と機能集団とに分けられ、自治体や国は「制度から成るシステム」あるいは「法的システム」として扱われている。最近では、実際の運営となれば、市民に優しい自治体、国民を大事にする国といったようにシステムの前に人間がいることが何かにつけいわれるようになってきて、市民の声が通ることを謳うソフトメゾが自治体や国に備わり始めている(もっとも国の場合は懐疑的ではあるが)。

著者は、ここに自治体や国を基礎集団の巨大版と捉え、この巨大版基礎集団と一般の基礎集団をリンクさせたい。これは、メゾとしていわゆる機能集団を基礎集団に(いつてみれば)丸め込むものであり、こうしておけば、集団は階層構造が円滑に基盤(下位)と上部(上位)構成され、階層構造内での各種作用が働きを持たせることができよう。

こう考えると、街づくりと都市づくりの間をどう行きかい(立場を基に交流)させるか、メゾが湧いてきそうである。また国(国民国家)についても、あくまでも階層構造において、下位からの最上部への作用が増すことにもなる。

一例としては、国が(多様化と非難される前に)もっと多様化を真に受け入れれば、少なくとも国民の政治による一方的な国民への同質化政策について議論が可能になると思っている(機が熟せば議論が進展)。なお国際レベルにつ

いてはいきなり国同士の連携をするのではなく、一度地球を介する方が全生物・全自然を背景にすることができると考える。

<追記>：機能集団である社会に、コミュニティなる基礎を置けば、自治体や国家までも連続できるとの考えも可である。そこでは、コミュニティの力を増して上位の機能集団(基礎集団的様相あり)との連携をもくろむのである。

14.3 市民レベルでの根幹議論も

この世の中、「そもそも」を語る機会が極めて少ないようにいつも思う。学術の事を言ってる訳ではなく、「そもそも」を語らない発言者には自身の立脚点が見えないばかりか、そこから大急ぎで積み上がったものが満足いくものであっても、横のつながりがないだけに、俯瞰もしにくく、議論の信頼感を失うが如くなるという。

その点、そもそも論を明確に抑えているコミュニケーションのコミュニティは躍動感あふれている。また、世の中、任意の自由組織である研究集団がいくつもあるが、そこではほとんど論議と談義で問題の背後が鮮明化し、展望も楽しめるようになっているという。

14.4 市民の日常で社会が良く見えるとは

市民は、社会の足元で生業してるからこそ足元からの遠展望により見えてくるものがある。そこでは、生活の営み次元においても政治経済的問題がみえるだけに、その背景にある国全体(や世界全体)の政治経済についても、論理的説明よりも「今の政治はおかしい」といったセンスで感ずることが多くなるはずである。また、そうしたスタンスで市民センスのメゾづくりが可能となるばかりか、そこからも市民の共感がセンス(社会的基礎土壌)として広がっていきそう。

一方の推進側では、推進側論理こそが社会の基本論理と捉え、そこには市民側の論理は入っていない。しかしながら、市民論理が巷に広がっていけば、行政は市民との協調も進めざるを得なくなると見ている。そこにおいて必要なのは市民論理を推進側論理とどう併存させるかにかかっている。市民論理が少しでも組織論理と共に位置すれば、市民側の意向が静かに浸透していくと思っている。

14.5 基礎土壌の活用には

近未来においても深刻化する諸問題について、市民がどう対応していくか、この点も考えたい。本稿後半に示した諸問題は現在はもちろんのこと近未来にわたって継続しよう。ではどうするか。いまから諸問題の対応を少しずつ土壌の耕しと土壌づくりに励むしかない。これには、専門家との協働はもちろんのこと、コミュニケーションのコミュニティで塾考し、市民運動に弾みがつくことになる。

本論では実際に向けた行動論を述べてはいないが、近未来ではそこまで行くことになる。

15. おわりに

本論の着目点の一つに「SDGs 運動が市民にとってどのように見えるか」を取り上げたが、本論を読んでもらえればわかるように、本論は SDGs に直に関係なく市民の営みの様子を SDGs という窓から見たといったところである。問題は SDGs 改善云々としたのではなく、SDGs を切っ掛けとして市民を取り巻く諸問題を赤裸々に述べることができたことは実に有意義なことである。そしてまた、市民の種々反応については、市民の直言や議論中の意見として収集できたことも大きな成果である。まずは明記させていただく。

a. 社会における市民活動において一番の問題は、市民層には SDGs の全貌や関係・関連性が伝わっておらず、市民層は断片的な事象を中心に生活を営んでいるのである。これは教育において特に著しく、公教育では全貌を教えず細部のみ教えるということが基本となっている。いくら周りの方が指摘しようが、国や自治体は知らぬ顔を通しがちである。公教育では、物事を批判せず、社会の和を乱さず、同質化社会の保持が続けばいいのであるといっても過言ではない。これが国民国家日本の基本であり、そのなかにいることが国民の義務となっている。権利主張が義務論を不問にして勝手主義を生み出すとの政権側の主張は身勝手であり、義務とは政権側のいうものではなく社会に対し権利を遂行することが市民の義務なのである。こうした新しい考えが今後根付くようにしたいものである。

b. では今後の市民社会をどう創り上げていくか。ただでさえ、市民社会における市民本位の形態を創り上げていくのにも困難が伴うところに、近未来としては科学技術の急激な進歩が人間存在を危うくするという大問題も加わり、人間の将来が実に不確実となっている。事の解決は容易ではないけれども、ここはどんな問題でも基本からくらいついて、基本に帰って社会的基礎土壌の充実を前面に押し出して足元からの思考・実践の積み重ねることを唱えたい。俯瞰と深堀のセスで世の中が見えるように、本稿においては、SDGs の窓をちゃんと当方側に設定し、世の中の束ね方や関連性をしっかりと見て取って、そうした面でのセスの醸成を第一義とした。

これより、理念理想のもと、世の中の束ね方も含め経済中心に代えて理念理想や人間中心が上部構造として組み立てられる。またその際に SDGs とは別次元で哲学論争や社会学論争がこれまでの社会の思考構造の見直しや合理主義批判と地域への思考帰着などに及び、こうして議論時代が到来すると考える。

c. では、肝心の SDGs は今後どうなる。、第一点は、今の路線を受けついで SDGs がリニューアルされるかどうか。大きな方法転化となるかは、哲学論争次第といえるのではなからうか。こうした SDGs 論争は、市民層における社会の束ね方や俯瞰が以前にもまして定着していき、市民社会の変革の一助に繋がることであろう。

第二点は、SDGs の存在が、国際協調や地球環境保全のム

ードを創ったことにより、市民側が有形無形に枠外思考やグローバル思考により自然と接することになったことを(大きな盛り上がりにならなくても)十分評価したい。その中で市民社会づくりがあると考えたい。こうした姿勢が技術進歩にも人間らしい対処に道を開く(開くべき)と思う。

d. ここで、SDGs の様相と市民について今一度考えると、SDGs が市民に働きかけて、SDGs だからこそ市民はこう行動するといったタスクフォース的取組ではなく、もとより市民生活向上を考えての行動がより磨きのかかった先行行動になるといいたい。

そう考えれば、市民生活による行動が SDGs にも結果的に対応しているとした捉え方で十分ではなかろうか。市民の SDGs の参加の機運が低調などといっているのは真の市民生活を見ていない推進側の都合である。もし仮に真に SDGs をより高めるなら、市民行動をかなり自由に見ることが肝要と考えられる。そうでないと、推進側が成果を上げねばならないとして発展性のない考えに陥り、SDGs の本来の価値にも思想的に反するのではといいたい。

e. 最後に本章をとりまとめてみると、諸問題への解決に向けては問題対処の姿勢が肝要であり、これにより健全な方策が宿るといいたい。諸問題は、皆さんと共に大いに語り合って解決していきたいものである。

所信；市民思考； 社会制度(システム)変更は経済至上主義を変えるには「やれるところから」として市民運動の役割があると考えている。それとともに社会システムを維持させる深層の共通土壌が、世の中の縛りや習慣とされているだけに、改善に向けては街づくりの観点から社会基礎土壌の積み重ねで対処したいものである。

謝辞。本稿における各研究者とは直に対面の談義をした。談義に応じていただいた皆様、ここに感謝申し上げます。

参考文献・引用文献

- 1) Johan Rockström, Pavan Sukhdev ; Pavan Sukhdev, EAT tockholm Food Forum ,2016 ウェディングケーキモデル
- 2) SDGs の改良・後継アイデアとしては、
 2. 1) 篠節子、中村勉、他；日本建築士連合会建築士 SDGs 行動宣言と環境部会の SDGs 活動の経緯、日本建築学会、建築 SDGsDay 発表梗概集、aij-SDGs アクション推進特別調査委員会、2026. 2. pp. 1-9
△論点；ケーキモデルの最上位に平和を設定、下部層には新たにレジリエンス層を設けている。
 2. 2) 他各位；△SDGs でなく SGGs のモデルは環境が最上位位置にきている。この他、最上位の論議にはいくつもの考えあり。
なお下部層もそれに合わせて種々変更や改良あり。

付録

本文にて掲載できなかった基礎土壌論骨子やコミュニケーションのコミュニティの様相について付録として記す。付録目次は以下の通り。

A1、基礎土壌論骨格

・社会的基礎土壌 ・関連研究経緯「社会的基礎土壌熟成」

A2、コミュニケーションのコミュニティの様相

- ・コミュニケーションのコミュニティを垣間見
- ・自由闊達と発散は必要
- ・社会や地域では未来や理想を語る機会や機運の低下
- ・市民と専門家の受止め方
- ・著者研究と実務者向けスタンス

A1. 社会的基礎土壌について³⁾

(1) 基礎土壌はどう見える； よく質問を受けるのが「基礎土壌をどうやって耕すのか」である。返答は決まって、市民の皆さんが自由奔放に話題を設定して喋りあい・語りあえば、自然にそうした語りが土壌となっていく、と。すると「そのロジックは」と聞き返されると、市民はロジックではなく感性で動いており、思考や行動がセンスを基にしている、と。とはいえ、少しは明確な答えとしてこの節を用意しておく。著者は、SDGsの背後を形成する社会の健全化を図り、社会実践なる生活の営み健全化として基礎土壌の熟成が必要と考え、市民視点での議論内容を以下に記す。みられての通り実に簡潔明瞭単純であり、その分、市民がセンスで自由奔放に味付けるのである。以下に具体的対応を記す。

a. 理念理想対応

- ・幅広い対象には感性からのアプローチで対応し、理屈は専門家とのタイプで整備し、諸問題を生活営みの上で関連づける。
- ・現在の塾考による過去や未来への連続性を充実した未来論議として進める。
- ・実際には足元からの思考・行動による積み上げ(社会づくり)を行い、社会において組織論理と市民論理の併存を目指す。

b. 対応策

- ・市民感覚を研ぎ澄まし(醸成)、諸事象へは感覚的反応を積み重ねる。
- ・社会づくりからの市民参加を探る
- ・市民層への働きかけについては；
行政への市民参加そのものの実現へ。
市民協力という押し付け・雰囲気を超え。市民主導を先行。

(2). 関連研究の経緯としての「社会的基礎土壌熟成」；

本研究がこれまで進めてきたのは社会的基礎土壌づくりであり、諸問題に対応するための基礎固めや基礎形成の意味を込めている。もちろん、諸問題とその周辺にある土壌とは本来的には「土壌+植物」のイメージで捉えるのであり、市民の基礎力アップは諸問題を手掛けることでも図れ、また基礎力アップで諸問題の解決へとアプローチも可能である。以下に系の構成を記す

a. 環境について、いくつかの系統がある。

- ・本研究では人間環境もありとした。
自然環境、社会環境(社会システム)、
人間環境；人間的触れ合いなど設定の環境、
本来は社会環境だがあえてそう言う必要性が高る。
- ・SDGs系では、下層から上層に向け自然圏、社会圏、経済圏と積み上げ、経済活動が社会と自然圏のもとで機能しているとしている。経済至上主義の検討として最上位論はやるべし。
- ・理念理想が人間活動の行動の基礎にある。本稿も理念理想が最上位に位置するとして、その流れを汲んでいる。市民感覚では、常々考える人の不屈の闘志はさることながら、雲行きが怪しくなりそうになった時、事が起こりそうになるような時には、理念理想が光り輝くと考える。

b. 階層構造； 本稿では、社会の階層性についてあまり触れて

こなかった。理由は市民側から社会を垣間見るので、少しでも扱う域は下層階層(下層に街づくり等が入る)がいいとしたからである。

・人口増や経済発展(生産)によって社会が拡大するには階層化のもと管理・制御の効率を高めるとされ、その考え(社会のシステム化)の基で人・物・情報などが行き交っている。以前には、低階層から高階層へと階層変動をふくめて両階層が繋がるようにすべきも声があったものの、そうはならず。未だに大問題となっている。これについてはいずれ稿を改めたい。

a. 市民の各種環境； 市民からは、モノやコトの全貌や関連性がなかなか見えない。専門家が市民に伝えねばならないときに、全貌と関連性の観点は割合欠け落ちることもある。だからこそ、基礎土壌の観点から素養を広く耕すことが必要といえる。

A2. コミュニケーションのコミュニティの模様

(1) 垣間見ると； コミュニケーションのコミュニティではすごい方々が集まってすごい議論をしているかのように思われがちであるが、(そのような所もあるが)実際はそうではなく、あるコミュニティでは和気あいあいの雑談も交えての談話になり、生活感がそれだけでも滲み出てくる。すなわち、市民のコミュニケーションのコミュニティには、各コミュニティには独自の気風がある。その気風としては、激論モード、発言中に他の人の発言を差し込まないモード、サイレントマジョリティのような無言モード、等、場所が変われば、人が変われば、といった種々のものがあり、これが沈思黙考のであったり、堰を切ったような怒涛の考となったりして皆さん楽しんでいる。

そんな場では、誹謗中傷はもとよりないが、特定の正論のみ押し通すのではなく種々の論が同時進行というスタイルで議論が成立している。それだけに、生活に根差したものや理念理想に俯瞰的見地などからのいろいろな意見が出できて、コミュニティの存在がいやがうえにも押し上げられている。よって、そこではSDGs活動についても、その枠に収まる議論ではなく、より市民らしいより広い見地からの議論が可能となっている。

(2). 自由闊達と発散は大いにあり； 一般に市民の集まりや学術系でも自由闊達と発散は毛嫌いされている。しかしながら、激論が続こうが続かまいが、自由闊達と発散は議論を飛躍させるためのものであり、議論の議論たる所以と考えている。しかも、発言には効率よくすることよりも各自の人生観や世界観まで滲ませる議論は、人対人の激しいやり取りへと発展していく。初めて参加された方には、会の模様は異様であり、別世界に足を踏み入れたと感じられることも多いという。

(3). 社会や地域では未来や理想を語る機会や機運も低下；

地域における市民運動を見ていると、頑張る方々がより頑張って運動を続けている。その一方では、そうした市民の周辺は未来や理想が語るチャンスも場もないところも結構ある。

なぜそうなるのか、世の中は多忙な世界であり、余裕がなかなかひねり出せない状況がある。たとえ論議して形あるものを作り出しても、この世の中のシステムがそれを受け付けなければいか、押しつぶしてしまうこともままある。こうしてみると、頑張りの世界もあれば別途に快樂の世界も必要なのか。

しかしながら、運動を進めるとは、いま受け入れられていないことを今だからこそ皆の力で受け入れさせる、というように捉えることができる。とはいえ、こうした動きが当たり

、
前になるように、社会の意識が高揚しなければならないとして理屈で頑張れば頑張るほど空虚感が漂いがちであるがゆえに、社会にかかわる皆さんの意識向上は日ごろから、できるところから少しずつやっていくしかないといえる。

(4). 市民と専門家の受け止め方の相違; 学術系の SDGs 宣言や SDGs アクションプランをみられた方は気づかれたと思うが、学術系各位は学術系らしく寸分狂いの無い緻密な研究プランを策定し、学術系あげて研究に取り組んでおられる。確かに学術系の専門家の役割はすごく大事であり、成果をあげ社会貢献に寄与して欲しいものである。

そうした状況下で、著者は(仲間とともに)市民サイドで取り組むとしたらどうすべきか悶々と考えていて、ようやく市民の本質である思考的背景が専門家のモノとは違うことに気づき、市民の方は専門家の先をリードしているかのように歴史的にも空間的地域的にも広がりを持ってセシよく俯瞰的に捉えておられることがよく分かった。細かな理論や整合性はそれぞれ学術に任せ、また現実的な街や建築空間は技術者に任せる分、将来と現在と過去を一気に展望し堪能も可能となっている。これが市民思考の特徴であり、本質である。だからこそ、市民と専門家が一体となれるのであると考える。

<追記>末尾に本稿の構成に一言。

諸問題を章立て項目として扱い、項目内で種々の話を可能な限り紹介したつもりである。市民側も諸問題毎にいろいろと発案するので、専門家にとってはまだらこしいと感じられそうだが、市民思考とはそんなものである。だからこそ専門家には通常みられない市民特有の枠外思考ができるのである。

(5). 著者の研究スタンス; コミュニケーションのコミュニティには多様な方が集まっている、そのうちの一人が著者であり、多様人員構成のなかで著者の研究スタンスを紹介する。

市民と社会を手掛けるようになったのは、数年前の事であり、その意味では著者は後発であることが却って面白さを実感するようになった。それは、先行する各研究者の後から、研究全貌を(市民の皆さんと一緒に)展望できることであり、遅まきリナーとしてじっくり自分の足元から楽しんでいけることである。

そうこうしているうちに、私、市民のみなさんに囲まれ、多感な市民からは、それこそ発散的なものの見方や考え方で、自由闊達に議論を楽しみ、自身も足元からの市民感の良さを満喫しているといったところである。

また、市民活動については、専門家とのタイアップはいうに及ばず、専門的知識の修得もさることながら、市民の中で知識が感性や活力にも転化することによりパワーアップの行動が可能となっていることを実感した。そんなこともあって、社会的基礎土壌育成が市民社会(社会一般)の基礎体力へと繋がっていると主張するようになった次第である。

(6). 著者の実務者向けスタンス; 著者と実務家との繋がりも記す。著者は、建築系実務者の研究会にもしばしば参加している。そこでは、建築設計や計画の領域の前段階となる建築的な意識を含めて、街づくりや建築づくりが如何にあるべきか、論理づけと実践を重ねてきた。

最近、学術系にいても、SDGs 運動を建築としてどう進めるかとか、その背景を論ずることが多くなってきた。特に、SDGs

のゴールを何が何でも建築と関連させてという動きもあれば、関係性の薄いゴールを扱わなくてもいい、とする旨もあった。

しかしながら、人間は当然ながら、自然・社会を含めた環境は建築系そのものとして、諸問題に直接関係しなくても、人間環境として扱うこともできるとして、そこには哲学や社会学をも取り込んで(建築系を膨らまして)いくことができるといった考えもでてきた。いまではこれらが必ず SDGs や時には SDGs を離れて新秩序の展開をという主張も少なからずみられるようになった。

このような威勢のいい動きに合わせて、著者も広い意味での人間環境をにらんだ展開を、実務系の場において論議しており、今後も続けていくつもりである。